

児童虐待とは、しつけとは異なり体罰によって子どもに恐怖心を抱かせる行為だ。子どもの心に傷を残すことが多い。日本では2000年に「児童虐待防止法」が施行されたが、その後も児童虐待の件数は増加傾向にある。児童虐待の背景には何があるのだろうか。

その原因として、育児にかかる親の負担が考えられる。日本では核家族化や地域の人間関係の希薄化が進んだことで、育児中の親が頼れる人が身近にいない。そのため、親には肉体的、精神的に大きな負担になる。また、ベビーシッターなどを依頼するとすれば、金銭面でも家計を圧迫する。これらが重なってストレスとなり、追い詰められた末に「児童虐待」に走ってしまう親がいるのだと推測する。

また、「子どもは親のもの」という日本特有の意識も原因の一つだと考えられる。日本では他人の子どもに口出しするのをためらう風潮があるように感じる。例えば、スーパーやファミリーレストランなどで子どもをたたいたりしてひどくしかっている親を見かけたことがあるが、「やめなさい」と注意する人はいなかった。けがをするまでエスカレートしてはじめて病院や警察で児童虐待が発覚する。他人の育児に立ち入ることをためらう意識が児童虐待を初期の段階で発見するのを遅らせていると考える。

これらの原因を踏まえると、親が育児ストレスを溜め込まない環境づくりが必要だ。そのために政府や自治体は子育てに関する講習会を定期的に行ったり、アドバイザーやカウンセラーを待機させて悩み事の相談に応じたりするなどの対策を充実すべきだ。また、アメリカでは「子どもは親の私物ではなく、社会全体で守るべきもの」という社会通念が形成されていてという。日本でも、地域や社会全体で子育てを見守るという意識を育て、児童虐待に気づいたら児童相談所などに知らせる勇気を一人ひとりが持つことが大切だと思う。